

《所沢税務署管内納税貯蓄組合連合会 優秀賞》

誰もが幸福であれる社会にするには

向原中学校 三年 渡部 奈穂

世界で最も幸福度が高いとされる国、フィンランドでは、消費税が二十四パーセントと高い。税が高いほど、人は幸せになれるのだろうか。

二〇一九年、日本では消費税が八パーセントから十パーセントへ引き上げられた。私は十パーセントの消費税が高いと感じてしまったのだが、世界的に見ると、日本の消費税は決して高くはないことが分かる。世界の平均税率は約十七パーセント。諸外国と比較すると日本は低い値であることに驚かされた。

日本では、納税額が上がると政府に対しての批判や不満が大きくなる。しかし、前述したフィンランドの消費税は二十四パーセントなのにも関わらず、フィンランド国民の九割以上もの人がこの税率に納得している。高い税を支払っても、国民が幸せを感じるのには、社会保障や行政サービスが充実しているためだろう。大学までの教育費が無償であったり、高齢者への支援も充実していたりするため、税がはつきりと目に見える形で利用されていることに安心感が感じられるのではないか。

税がとても安かったり、なかったりしたら、自分で

稼いだ金は自由に使えるようになる。しかし、上下水道や道路の整備、学校、警察などは使えなくなり、所得の差により豊かな生活が送れなくなる人がいるかもしれない。税金が高いフィンランドは、日本に比べて貯金額が低い。しかし、老後に貯金が二千万円以上ないと安心できないといわれているこの国と、貯金がなくとも生活が保障され、人間らしい人生を送れる国とでは、どちらが心に余裕をもって暮らしていけるのだろうか。

税が高い、ということは、それだけ国民に対する支援も手厚いということだ。安ければ安いほど国民の負担は軽いが、税が高いからこそ得られる安心感があることが分かった。昨今、日本では税の用途が不透明であったり、政治家たちの都合が良いように税が使われてしまっているイメージから、税はあまり良い印象を受けていない。税は国民がいないと成り立たないからこそ、目に見える形で支援を活発にし、国民に不安要素を与えないことが最優先になるのではないか。高い税を払ってでも納得される税の使い道をするのが、幸福だと考える人の増加へ結びつくことになると思った。